

1. はじめに

認知言語学的によれば、多義語の様々な意味用法は、プロトタイプを中心として、あるスキーマを共有しつつ一つのカテゴリーを形成していると考えられる。本稿では格助詞二がどのような意味の多義構造を持っているのかについて考察することを目的としている。

2. 先行研究

格助詞二の意味・用法に関する研究は多いが、このうち認知言語学的観点から多義語としての意味構造に触れたものは、国広 (1986)、堀川 (1988)、杉村 (2002)、菅井 (2000, 2001)、森山 (2001a, 2001b, 2003, 2004b) などがある。

森山 (2004b) 以外の先行研究では、二の様々な用法は、「着点」としての意味を何らかの形で共有しているとしているか、もしくはプロトタイプであるとしている。

しかしながら森山(2004b)では、このような立場に疑問を唱え、二は認知主体の4通りの把握の仕方により、移動の着点、移動の起点、存在の位置関係、経験の主体という4つの意味用法のカテゴリーに分けられると述べている (表1)。

本稿ではこの立場を踏襲し、4つのカテゴリーそれぞれについてさらに分析を加え、最終的に格助詞二の多義構造全体がどのようになっているのか考察することにする。

表1 4通りの把握と二格の意味との関係

| | プロセス的把握 | 存在論的把握 |
|-------|--------------------|---------------------|
| 客観的把握 | 移動の着点 (プロセス的事態) | 存在の位置関係 (存在論的事態) |
| 主観的把握 | 移動の起点 (プロセス的事態) | 経験の主体 (プロセス的事態) |

3. 格助詞二の4つの意味用法

3-1 移動の着点

この用法は二格が「目標領域の能動的参与者」として、「源泉領域の能動的参与者」に対し、何らかの「移動の着点」を表す用法である。この二格の用法は、ガ格で表される「源泉領域の能動的参与者」に対し「対時性」、すなわち主格に対して従属せず、主体性を持って対峙する性格を持っている (図1)。

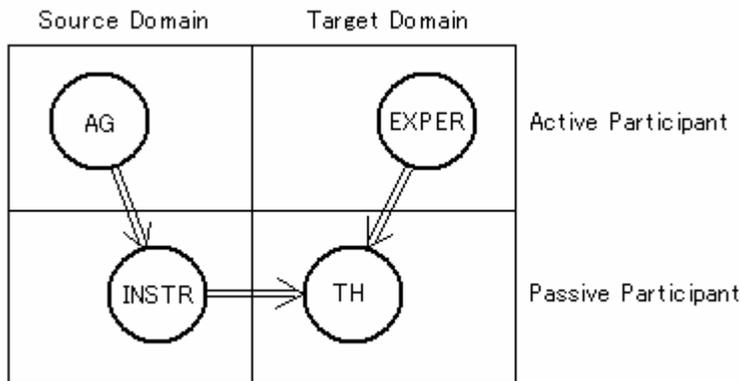
3-2 移動の起点

一方、認知主体の何らかの動機づけにより、プロファイルされた動力連鎖の最上流 (典型的には「動作主」) に必ずしも最大の際立ちが与えられないこともある。例えば最上流である「動作主」よりも最下流の「被動作主」に最大の際立ちが与えられた受動文では、能動文でガ格であった参与者 (ここでは動作主) は、日本語では普通二格で表わされる。その結果、受動文で二格によって表わされた「源泉領域の能動的参与者 (動作主)」は、ガ格で表わされた「目標領域における受

動的参与者(被動作主)」に対し動力連鎖の上流に位置し、「起点性」を表すようになると同時に、「能動性」を持つことになる(図1)。

「移動の着点」用法はガ格に対し「対峙性」だけを持つのに比べ、「移動の起点」用法では、ガ格に対して「対峙性」だけでなく、「能動性」を有している点が異なっている。

図1 他動性を持った動力連鎖とその参与者役割(Langacker 1991a:327)



3 - 3 存在の位置関係

この用法は(1)~(4)のように空間や時間、さらにはある1次元の座標上での位置関係を示す用法で、TRであるガ格に対し、二格はLMの役割を果たしている。両者の関係は、「ガ格の参与者を二格との関係で位置づける」という関係である。但しここではガ格から二格への「移動」というものではなく、相互に静的に対峙する関係となっている。この用法はガ格から二格への心的走査が行われていると考えることもできる。また二格はガ格に対し「能動性」を有しておらず、心的な意味での「着点」と解釈される。また二格はガ格に対して「対峙性」を有している。

- (1) 机の上に本がある/ない。空間的位置
- (2) 彼は10時に寝る。時間的位置
- (3) わが家は学校に近い。位置のLM
- (4) この素材は熱に強い。情態のLM

3 - 4 経験の主体

所有は(5)のように、他動詞「持つ」で表すこともできるが、自動詞「ある」で表すことも可能である。前者は事態を動力連鎖としてプロセス的に把握した場合、後者は事態を存在論的に把握した場合である。後者の場合、所有主は二格で表示される。

- (5) a. 私は子供を持っている。 b. 私に子供がある。所有主
- (6) 私には富士山が見える。知覚主
- (7) 姉にバイオリンが弾ける。能力主
- (8) 私にはそのことがとてもうれしかった。感情主

ここで(5-a)の他動詞文では「子供」は「私」に対し動力連鎖の下流にあってその支配を受けるためヲ格で示されているが、(5-b)の自動詞文では「私」は「子供」に対して動力連鎖の上流

にあり二格で表されていることに注目すべきである（図2）。また所有の「ある」は存在の「ある」とは異なり他動詞文で表せるが、これは(5-b)の「私」が「子供」に対して単に「対峙性」だけでなく、より積極的な形で「能動性」を有していることを示している。(6)～(8)も同様である。

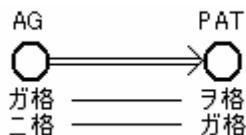


図2 所有の他動詞文の格表示

「存在の位置関係」用法と「経験の主体」用法は、ガ格に静的な「対峙性」を持っている点で共通しているが、両者に心的な移動があると考えれば、前者はガ格に対する「能動性」を有しておらず「着点」的であるが、後者はガ格に対する「能動性」を有しており、「起点」的な用法である点が異なっている。

4. 二格の放射状カテゴリー構造

4-1 移動の着点

| 表2 | 人 | モノ | 場所 |
|----------|-----------------------------|------------------------------------|--------------------------------------|
| 具体的移動 | (1-a)友だちに本をあげる。 社長に会う。 | (1-d)携帯にストラップをつける。 服にしみがついた。 | (1-g)机の上に本を乗せる。 映画(を見)に行く。 |
| 抽象的移動 | (1-b)学生に日本語を教える。 母に甘える。 | (1-e)ゲームボーイにはまる。 政府は改革に取り組んでいる。 | (1-h)遠くアメリカに思いを馳せる。 ようやく日本に慣れてきた。 |
| メタファー的移動 | (1-c)息子を医者にする。 息子が医者になる。 | (1-f)水を氷にする。 水が氷になる。 | (1-i)都を京都にする。 都が京都になる。 |

4-2 移動の起点

| 表3 | 人 | モノ | 場所 |
|----------|----------------------------------|--------------------------------|-------------------------|
| 具体的移動 | (2-a)友だちに本をもらう。 彼は犯人に殺された。 | (2-d)銃弾に死す。 台風の家を飛ばされる。 | - |
| 抽象的移動 | (2-b)先生に日本語を教わる。 彼は国民に愛されている。 | (2-e)借金に苦しんでいる。 騒音に悩まされている。 | (2-h) 彼は大都会に染まっていった。 |
| メタファー的移動 | - | - | - |

4-3 存在の位置関係

プロトタイプは(3-a)のような用法であり、ここから(3-b)や(3-c)のような用法が拡張し、さらに(3-c)から(3-d)のような用法が拡張したと考えられる。

(3-a) 空間的位置：机の上に本がある／ない。

(3-b) 時間的位置（場所の時間へのメタファー的写像）：今日は10時に寝る。

(3-c) 空間的位置のLM（位置のLM化）：わが家は学校に近い。

(3-d) ある座標上のLM（位置のLM化、空間の抽象化）：この素材は熱に強い。

4-4 経験の主体

(4-a)から(4-b)や(4-d)が拡張し、さらに(4-b)から(4-c)が拡張したと考えられる。

- (4-a) 所有主：私に子供がある／いる。
- (4-b) 知覚主：私には富士山が見える。
- (4-c) 能力主：姉にバイオリンが弾ける。
- (4-d) 感情主：私にはそのことがとてもうれしかった。

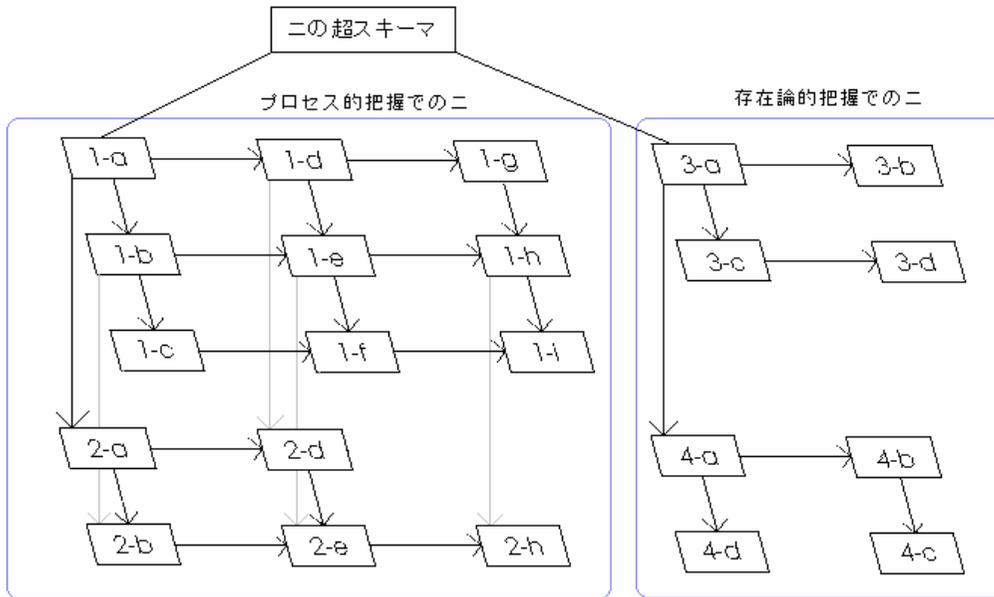
5. まとめ

二格には「プロセス的把握」での用法と「存在論的把握」での用法がある。その双方に、認知主体の見えとの関わりの弱い「客観的把握」と、認知主体の見えが色濃く反映した「主観的把握」という把握の仕方が関与している。二格の超スキーマは「ガ格に対する対峙性」である。

表4 二格の意味用法のまとめ

| | 把握の主観性 | 把握のプロセス性と二格の意味 | | ガ格に対する二格の特徴 |
|---------|--------|----------------|------|-------------|
| 移動の着点 | 客観的把握 | プロセス的(動的) | 着点 | 対峙性 |
| 移動の起点 | 主観的把握 | プロセス的(動的) | 起点 | 対峙性、能動性 |
| 存在の位置関係 | 客観的把握 | 存在論的(静的) | (着点) | 対峙性 |
| 経験の主体 | 主観的把握 | 存在論的(静的) | (起点) | 対峙性、能動性 |

図3 格助詞二の意味構造



<参考文献>

森山新(2001a)「認知的観点から見たヲ格と二格の意味・用法の違い」『日本語教育研究』4.
 森山新(2001b)「認知的観点から見た格助詞ヲ、二の意味のネットワーク」『日本語教育研究』2.
 森山新(2003)「認知的観点から見た格助詞二の意味構造」『Foreign Language Education』10-1.
 森山新(2004a)「格助詞ガの意味構造についての認知言語学的考察」『お茶の水女子大学人文科学紀要』57.
 森山新(2004b)「認知主体の把握の仕方と格助詞二の多義構造について：認知言語学的観点か」『日本学報』59.